成安造形大学
附属近江学研究所

近江通信紙

Omi Studies
Vol.32
2025.04
SEIAN UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

巻頭インタビュー

びわ湖放送 代表取締役社長 西川忠雄（にしかわ ただお）さんに聞く

びわ湖放送の15分番組で、令和５年の春から、近江の魅力を美しい映像とそこに暮らす人々のインタビューで構成された「琵琶湖まんだら」がスタートした。この番組の企画を全面的に推進した人物が、現在同社の代表取締役社長、西川忠雄氏である。今回は琵琶湖の南側から滋賀県全体を一望できる大津市鶴の里にあるびわ湖放送株式会社本社の社長室を訪ね、地方メディアの重要性とともに近江の魅力について語っていただきました。

聞き手：加藤 賢治［附属近江学研究所 副所長／成安造形大学 教授］

地域にあるものを、地域の外から消費者の視点で取り上げることが大切だと思っています。

「琵琶湖まんだら」がスタートした前年に社長に就任されたと伺いましたが、その時の様子を教えていただけますか。

元々放送関係の仕事をしていたわけではありませんでした。よって、正直、放送局とは何をするところなのか。NHKをはじめ、大阪には全国ネットの放送局があり、滋賀県ではその電波を受信することができる。要するに多くのチャンネルがある中で、地方の放送局の役割とは何なのか。ということから出発しました。

ちょうどその年は、びわ湖放送開局50周年の年でしたので、それを考えるのに良いタイミングでした。私はもちろん知らなかったのですが、開局当時（50年前）に「フリータイムジョッキー」という、視聴者からハガキでメッセージをもらい、アナウンサーが読み上げ、その質問や意見に対して話を展開するという、ラジオのディスクジョッキーのテレビ版のような番組があったそうです。当時びわ湖放送としては、少ない予算で独自の地域番組を作るための苦肉の策としての番組だったそうですが、非常に人気があったというのです。当時を知る方にお聞きすると、自分が書いたハガキがテレビに出たことや、知り合いが映っていた、いつもの馴染みの店が紹介されて嬉しかった、地域の祭りが話題に出たなどの声が聞かれました。地域放送局の最も大きな役割はこれだと思いました。地域の現状を丁寧に取りあげ、発信する。そして地域に暮らす人々の声を拾い上げる。滋賀県に暮らす人々の身近に寄り添う放送局でなければと思いを新たにしました。

その思いから「琵琶湖まんだら」という番組につながるのでしょうか。

実は、私の発案というより、滋賀県の経済団体をリードされる綾羽グループの会長 河本英典さんのご助言から成立した番組だったのです。私が社長に就任した途端に、河本さんから琵琶湖、滋賀県の良いところを紹介する番組を制作したらどうかと提案くださったのです。河本さんとは以前から面識があり、私が県の職員として音楽ホールでの芸術文化振興や観光振興、水産振興から農業遺産などに関わってきたことをご存知でしたので、その経験を活かして作ってほしいと。番組の名前は、以前、経済同友会の会報誌に宗教学者 山折哲雄 先生が紹介された琵琶湖と近江の風土を詠った詩のタイトルである「琵琶湖まんだら」に決まりました。

私の仕事は、いろいろありましたが、まずこの番組をスタートさせることも大切な仕事となりました。

西川さんが県職員であったころ、近江学研究所をはじめとする成安造形大学との連携がありましたね。

そうです。私が水産課に在職していた時、琵琶湖の淡水真珠の振興に力を貸していただき、成安造形大学で、滋賀県のブランディングを発信する「MUSUBU SHIGA 空想MUSEUM ー近江のかたちを明日につなぐー」という展覧会（2015年）に関わらせていただきました。その時に、淡水真

珠だけでなく、近江八幡のヨシ松明や、和蝋燭、地酒、美術、工芸品など、ものづくりの視点で捉えた滋賀の魅力と、それを支えている人々の活動に触れることができ、新鮮でした。「琵琶湖まんだら」を制作するスタッフとは、早速、この時の知見や、近江学研究所のこれまでの研究成果なども踏まえて、打ち合わせを重ねました。

私は、地域にあるものを、地域の外から消費者の視点で取り上げることが大切だと思っています。そしてさまざまな経験から、滋賀県の魅力を外に発信することばかりを考えるのではなく、びわ湖放送は、滋賀県に暮らす人たちに、改めて滋賀県の美しさや、暮らしの形、すなわち他の地域に無い、かけがえのないものを伝えなければと思うようになりました。

例えば、近江八幡には、素晴らしい自然環境と、江戸時代からつながる歴史的な景観、そして伝統的な祭礼が残っています。そこで大事なことは、そこに活き活きと暮らす人たちがいるということです。近江八幡に限らず、滋賀県の良いところは、自然と歴史文化の中に人々が暮らしているということだと思っています。京都では、そこに暮らしている人々が不自由になるほどの観光客が訪れ、観光公害と呼ばれ、一つの社会問題となっています。滋賀県においては、団体客が押し寄せるのではない、体験型や少人数による観光など、新しい時代の観光のあり方が提案できるのではないかとも思っています。

最後になりましたが、近江学研究所に期待されることなどありましたら一言お願いします。

本当に私にとって近江学研究所との出会い、特に加藤先生や、同研究所の石川亮先生には、いろんなことを教えていただき、感謝しています。現地に入って、多くの人々と交流することから学びが始まるということも知りました。メディアは人の役に立つためにあると思っています。これまで以上に成安造形大学と連携し、つながっていきたいと思っています。よろしくお願いします。

西川さん、長時間にわたってありがとうございました。我々も、学内で開催した展覧会やイベントを通じて、さまざまな関係者との出会いがあって今があると思っております。近年は、特に自然災害に対する脅威が目の前に迫っています。防災の観点からは地域放送局の役割が非常に大きいと言われています。また、さまざまな形で、連携ができればと思っています。「琵琶湖まんだら」は今後も放送が続くと伺っています。滋賀県の魅力を、そこに居住する人たちに伝えるという大切な役割をよろしくお願いします。

西川 忠雄
1988年に県庁に入り、観光交流局長などを歴任。2019年から2022年３月に定年退職するまで農政水産部長を務めた。2022年６月よりびわ湖放送代表取締役社長に就任。びわ湖放送では地域密着型のメディア戦略を推進。地域の文化やコミュニティとの連携を大切にし、地域住民に愛される放送局を目指している。

近江学研究所 2025年度研究テーマ 「惣・座・講」研究プロジェクト「講」

近江学研究所では、2023年度から、３ヶ年の研究テーマとしてさまざまな種類のコミュニティを取り上げ、人々のつながりを多角的に見つめてきた。「惣」は、地縁・血縁のコミュニティを、「座」では職人や商人、芸能など生業のコミュニティを、そして、最終年の「講」では、信仰に基づきながら、その場に展開する楽しみや、助け合いのつながりについて検証している。伝統的な「講」には、お伊勢参りや愛宕詣、大峯山へ参るなど、地域で小集団をつくって、資金を工面し、代表者が旅に出てお参りをしてお札を持ち帰るという基本的な形式が見られる。そのコミュニティから見えてきたものは、集団で楽しむ庶民の姿であった。毎月一度、集金を目的にみんなで集まり、飲食を伴う楽しい時間を共有していた。そして年に一度は順番に代表者を決めて、旅に出る。その旅で楽しんだ経験をまたみんなに伝える機会をつくる。近代に至るまでは、最高の遊びとして、「講」が行われる日を楽しみにしていた村人の暮らしを垣間見ることができた。近代になると、さまざまな遊びが生まれ、いわゆる楽しいハレの日は、日常化し、素朴な「講」は形式的となり、集落の風習となって今に伝わっている。

真野の庚申講（『成安造形大学附属近江学研究所紀要』第10号から転載）

一方で、かつての「講」に変わるコミュニティは、信仰から離れて、特定の地域に限らず、また、人々のつながりも広がってさまざまな姿に変化して存在する。いわゆる趣味趣向の一致するものが集まるスポーツや音楽などのサークル活動であり、そこには、日常の疲れを心身ともに癒す機能とともに互助や共助という、生きていく上で無くてはならない要素が含まれ、大切なコミュニティであることが理解できるのである。

文化誌『近江学』第16号
テーマは「座 なりわいのコミュニティ」

歴史用語としての「座」とは、代表的なものに集落における宮座と呼ばれる祭祀組織、また、田楽、猿楽などの芸能集団として、そして権力を有する社寺や貴族を本所として（背後に持って）独占的な商業活動を行う集団としての「座」がある。しかし、今号で取りあげた「座」とは、近江学研究所の独自の視点によって、生きるための生業を成立させることを目的とした集団と捉え、職人や商人、芸能集団などを対象としたコミュニティに注目した。

宿場町に見られる旅籠や、本陣などの宿泊施設には、多くの職人が出入りし、お互いの生業を成り立たせるために、さまざまな工夫や努力が積み重ねられていた。一方、琵琶湖を生業のもととした現代の職人（日本酒、発酵食、和蝋燭、木桶、淡水真珠）たちも、それぞれの生産活動に加え、情報を共有し、未来社会を常に意識しながら生業を成立させる姿があった。過去から今日にいたるコミュニティの在りように迫った一冊である。

ISBN 978-4-88325-841-3
発行年月 2025年３月
サンライズ出版 1,980円(税込)

研究員の推し！「場所・モノ・コト・ヒト」

「藤ケ崎龍神社の絶景」

加藤賢治［近江学研究所 副所長／成安造形大学 教授］

藤ケ崎龍神社
滋賀県近江八幡市牧町
ＪＲ近江八幡駅から市民バス（あかこんバス）
「新畑北」バス停下車徒歩15分
＊日祝・年末年始運休

2025年１月５日、近江八幡市の藤ケ崎龍（りゅう）神社を参詣した。

自動車で湖西から琵琶湖大橋を渡り、さざなみ街道を近江八幡市方面へ20分程走ると、道路は湖岸から小山を少し登る坂に差し掛かる。その左手に「史跡水茎岡山城跡」と彫られた大きな石碑が見える。この小高い山は、水茎（みずくき）の岡（おか）と呼ばれ、室町期に古城が築かれていた歴史がある。その小山の琵琶湖側に、藤ヶ崎龍神社がある。かつて近江学研究所研究員である石川亮氏と、自転車で琵琶湖を一周するビワイチを実行した際に、初めてここを訪れた。琵琶湖に突き出た大きな岩にしめ縄が巻かれ、小さな祠が安置されているこれが藤ケ崎神社で、藤ケ崎龍神が祀られている。そしてその背後の岩肌の洞窟の奥にある祠が妙得龍王（みょうとくりゅうおう）神社で、藤ケ崎龍神の妻が祀られている。この二つの神社を合わせて藤ケ崎龍神社という。藤ケ崎の「藤」は、三上山の大百足（むかで）を退治した藤原秀郷が、この地で龍神から褒美として米が尽きることが無い米俵をもらった故事に由来する。

神社の祭神や地名の由来も興味深いが、透き通った琵琶湖の湖水と、白砂の上に岩が点在するコントラスト。そして碧い琵琶湖の沖には正面に沖島が浮かび、左奥には雪をかぶる比良山系の稜線が、右には長命寺山が聳（そび）えるという、なんと言ってもこの場所は「絶景」という言葉に尽きる。平安時代の宮廷画家として知られる巨勢金岡（こせのかなおか）が、この地を訪れ、この景色を描こうとしたが、あまりの「絶景」に圧倒され、筆（水茎）を捨ててしまったという。言葉にできない「絶景」を物語る伝説に納得した。ここは、神社の氏子さんたちが、毎日掃き掃除をされているようで、いつ訪れてもゴミ一つ無く美しい。心が綺麗に洗われる場所である。ぜひ一度訪ねていただきたい。

「近江学MUSUBU座」展望を語る

石川 亮［近江学研究所 研究員／美術家／成安造形大学 教授］

2024年度の研究テーマ「座」における現代のなりわいのコミュニティ研究は、近江学研究所公開講座「近江のかたちを明日につなぐ」の登壇者及び成安造形大学芸術学部地域実践領域の研究に関わりが深く、近江湖西地域を活動の拠点とするキーパーソンによる対話企画から始まった。２名一組、３回にわたる対談で現在のビジネス展開や今後の展望、課題など、それぞれの視点から語り合った。また対話の締めくくりとして2024年11月湖北、海津の魚治「湖里庵」にその６名が集結し座談会を開催することができた。

「近江学MUSUBU座」座談会（2015年度に成安造形大学内で開催した展覧会「MUSUBU SHIGA空想MUSEUM」に由来する）で見えてきた話題の一つに、後継者育成とその教育、ものづくりを進めていく中での対話、コミュニケーションのあり方、社会背景と共に変化することが共通の課題として挙げられた。また生活様式の変化に伴う人々の価値観の変化は当然のことながら、手仕事、ものづくりに取り組むクラフトマン、職人においてもその姿勢や関係性は大きく変化していると言える。例えば、以前は「師の背中を見ながら技を盗み、自身の手法を確立する」といった感覚は、自ずと学び、工夫の日々を送る、正に鍛錬という言葉がイメージできる（現場主義）。対し今日のそれは効率化、制作プロセスをシステム化していく流れ、その中でノウハウをきちんと教え一つひとつをデータ化するなどの変革が起こっている（システム思考）。システム思考とは一定の質を担保していける側面と、機械化、効率重視から創造性や工夫が乏しくなる側面など、一長一短と言える。これはものづくりや職人の世界に留まらず、学校教育しかり、実社会の現場においても重なってイメージできるであろう。

次にものづくりの原点、原初について改めて考えてみたい。近江は言わずもがな四方を山に囲まれ、中心に湖を携えている。つまり山と湖に挟まれた空間に我々人間の暮らしは許され、今日まで生き延びることができた。そこにある「木」を使い、流れ出る「水」を受け止め、これらのエネルギーを「火」に変換し暮らしを作ってきた。いわばこの営み、工夫の集積がものづくりの原点、原初と考えることはできないだろうか、「火」「水」「木」をものづくりの三要素として捉え、2025年度は先に示したものづくりにおける関係性、教育、技術継承などの課題と合わせ再考してみたい。

「近江学MUSUBU座」座談会
── 2024年11月 湖北、海津の魚治「湖里庵」にて

石津大輔　［米農家／針江のんきぃふぁーむ代表］
冨田泰伸　［造り酒屋／冨田酒造有限会社代表取締役］
大西　巧　［和ろうそく職人／有限会社大與代表取締役］
中川周士　［桶職人／中川木工芸比良工房主宰］
左嵜治右衛門謙祐　［鮒鮓職人／有限会社魚治代表取締役］
杉山知子　［真珠小売業／神保真珠商店３代目店主］
ファシリテーター　石川　亮

Information

成安造形大学附属近江学研究所では研究所の研究活動や大学情報などをお知らせする『近江通信紙』を近江学フォーラムの会報として2009年から発行してきました。2025年４月、近江学フォーラムのリニューアルにともない、今号から広く一般の方にもご覧いただける情報紙へと生まれ変わり、この春、誕生した近江学研究所の情報が集まるスマートフォン向けポータルサイトからもご覧いただくことができるようになりました。

ポータルサイトでは講座やイベント、刊行物などの最新情報を発信しています。近江学フォーラム会員への登録や講座申込などもポータルサイトから行っていただけますので、ぜひご活用ください。

2025年度 研究員紹介（敬称略・50音順）

顧　問	木村 至宏	［成安造形大学 名誉教授］
所　長	小嵜 善通	［成安造形大学 学長／教授］
副所長	加藤 賢治	［成安造形大学 副学長／教授］
研究員	石川　亮	［成安造形大学 教授］
研究員	小嵜 善通	［成安造形大学 学長／教授］
研究員	加藤 賢治	［成安造形大学 副学長／教授］
研究員	田口 真太郎	［成安造形大学 講師］
研究員	永江 弘之	［成安造形大学 教授］
研究員	真下 武久	［成安造形大学 准教授］
研究員	三宅 正浩	［成安造形大学 教授］

＊参与・客員研究員は下記WEBサイト「近江学研究所について」ページにてご紹介しています。

発　行　日：2025年 4月 1日
編集・発行：成安造形大学附属近江学研究所　成安造形大学【　】
〒520-0248 滋賀県大津市仰木の里東4-3-1
TEL.077-574-2118　FAX.077-574-2120
E-mail. omigaku@seian.ac.jp　URL. https://omigaku.org/

附属近江学研究所の最新情報はコチラのポータルサイトからご確認ください

https://portal.omigaku.org/